慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

2016 連合三田会大会

10月16日、日吉にて開催

本年も晴天に恵まれ、連合三田会大会が開催された（2016.rengomitakai.jp）。今年の全体テーマは「共に過ごそう、生涯の1日」、実行委員ユニフォームは法被、そのいでたちがお祭り気分をさらに盛り上げていた。医学部は当番学年である65回生（救護部会長　黒瀬巌君）、67回生（催事部会　白杉望君、福島裕之理事、模擬店部会　中道司君）が中心となり、医学部講演会、ブラックジャックセミナーを開催、三四会赤倉山荘運営委員会による赤倉山荘模擬店を出店した。また、本年度大会の新企画は、「楽しくのみ隊」。救護班も水を持って会場を巡回し泥酔を予防したため、例年のような救急隊を要請するほどの泥酔者もなく、大会全体の縁の下の力持ちとして来場者の方達に楽しい思い出をプレゼントすることができた。

講演会の後で

白梅会（医療看護学部同窓会）、KP会（元共立薬科大学・薬学部同窓会）からも昭和61年度卒業生、学生が、三四会会員とともにスタッフとして参加した。三学部合同授業、KAA等を通じ、学部間の連携は年々活性化していることの証と思われる。

講演会には、比企能樹連合三田会会長（37回）はじめ、今年も多くの参加者があった。武田三四会長、戸山理事の挨拶の後、来年が医学部開設100年であることから、そこからさらに100年先を見据えたイノベーション戦略を、慶應義塾全体のグローバルな視点から、岡野医学部長・生理学教授、古川俊治参議院議員・外科学教授（兼担）・弁護士（66回）にお話いただいた。岡野教授は、医学部開設200年までに、ノーベル医学・生理学賞受賞者を輩出し、医学部発信のイノベーションをもって世界に冠たる慶應義塾大学に進化させて行きたい、そして100年後、江戸時代の人口でありながら100歳以上が30％を超えるという逆ピラミッド型の超高齢化社会の諸問題に現代版福澤精神で挑戦して行こう！と熱く語られた。古川氏は、この先100年の科学技術の進歩について具体的な予測を述べられた上で、生命倫理等の議論を通じて既存観念に挑戦し、技術を活用することの重要性を強調された。両氏とも慶應医学に対して、大学内の学部間連携と、優秀な関連病院を生かして、研究成果を積極的に社会に還元していってほしいとの希望を述べられた。

ブラックジャックセミナー

赤倉山荘模擬店

三四会ののぼり

ブラックジャックセミナーは昨年スタートした企画であるが、今回は手術体験イベント（予約制）だけでなく、当日参加可能な「キッズのための医療体験セミナー　ドクターに挑戦」（救急医学教室共催）を企画し、来場の子供達に血圧測定、救命救急、内視鏡手術を体験してもらった。ブラックジャックセミナーは口コミでも広まっているようで、「医学部の次の100年を担う」お子さんも参加したのかもしれない。

当日はグリーンリボンキャンペーンの日にもあたり、赤倉山荘模擬店では、おまんじゅう、山荘パンフレット配布とともにキャンペーンを紹介した。今年も模擬店はメイン通りに位置し、妙高市から駆けつけたミョーコーさん効果、当番学年の尽力、そしてKAAの医学部、看護医療学部、薬学部の学生のお手伝いもあり、1500個準備したおまんじゅうはほぼ1時間半で底がつきてしまった。

講演会終了後の記念館前三四会懇親会場にも、卒後50年の先生方はじめ、多くの先生がご来場、楽しくのみ隊も、懐かしい顔を見つけて巡回し、晴天のもと和やかなひとときを過ごすことができた。

連合三田会未体験の先生方、会は三四会会員であれば誰でも参加可、懇親会場は、毎年日吉記念館前の広場に朝からのぼりを立て確保しています。来年は、写真ののぼりを目印に、各会場へ足を運んでいただければ幸いです。

（佐藤美奈子　65回）

日本医師会代議員について

三四会理事　近藤　太郎（68回）

日本医師会代議員の定数は363名。47都道府県医師会ごと、会員500名に対して1名の代議員が割り当てられている。

たとえば東京都医師会には39名、神奈川県医師会には18名、千葉県医師会には8名、福井県医師会には3名の割り当てで、各都道府県医師会代議員会で2年ごとに選出される。

平成28年6月25日現在、慶應医学部三四会会員では9名の日本医師会代議員がいる（表）。

日医ニュース（平成28年7月20日）の日本医師会代議員一覧に掲載されている最終卒業校（大学もしくは大学院）から各大学医学部の人数を調べてみると、日本大学＝17名、日本医大および久留米大＝15名、東京医大＝14名、神戸大＝12名、大阪医大＝11名、順天堂大および慈恵医大＝10名、慶應大と同じく岩手医大、新潟大が9名である。

北海道医師会	沖　一郎（58回）
福島県医師会	星　北斗（68相当）
埼玉県医師会	髙橋　茂雄（54回）
千葉県医師会	日比野久美子（61回）
東京都医師会	近藤　太郎（68回）
	秋田　博伸（53回）
神奈川県医師会	小林　信男（47回）
	小林　米幸（53回）
福井県医師会	池端　幸彦（59回）

第4回「PSAスクリーニングキャンペーン」

10月1日（土）に開催

近年日本では前立腺がんの患者数が急増しています。前立腺がんは血液検査による腫瘍マーカーPSAにより早期発見が可能で、多くの自治体が、がん検診にPSA検査を取り入れはじめていますが、受診者数はまだ非常に低く依然進行してから発見される例が後を絶ちません。

こういった現状をふまえ、医学部泌尿器科学教室ならびに慶應義塾大学病院では2013年より前立腺がんの早期発見、適正治療をめざすために、「PSAスクリーニングキャンペーン」を開始しました。今年も病院休診日である10月1日（土）に医学部北里記念図書館2階北里講堂において、4回目となるキャンペーンを開催いたしました。

本イベントはプレスリリース時から、数社のマスメディアから、イベント開催に関して紙上への掲載のお申し出や、当日の取材の申込みもあり、関心の高さを伺うことができました。

メディアへの掲載もあったことから、定員150名のところ、200名を越える申込みがあり、当日も雨天にも関わらず180名近い方にお集まりいただきました。

イベント冒頭の市民公開講座では、「前立腺がんはどんながんなのか？早期発見の大切さをお伝えします」と題して、医学部泌尿器科学教室の大家基嗣教授が約1時間にわたり、講演があり、前立腺がんの世界の現況から、PSAとは何か、また前立腺がんの診断から最新の治療に至るまで幅広く、わかりやすくお話いただきました。

後半のPSA無料検診では、150名ほどの方が検診を受けられました。また、採血待ちの時間を利用し、泌尿器科専門医による無料相談ブースも設け、多くの方が健康上の悩みや、現在の治療に関する相談を行いました。一時間半ほどで全てのかたの採血が終わり、無事イベント終了となりました。

検査結果は後日個人に郵送され、精査が必要な方は慶應義塾大学病院での優先的な外来受診予約もできるようにしました。

実施後のアンケートにおいても、「またこのようなイベントがあれば参加したい」「他の病気でもこのような公開講座をやってほしい」など、非常に好評な声を聞くことができました。

今後もこうした市民向けの活動を継続し、地域医療にも貢献していきたいと思います。

（泌尿器科学教室　小坂威雄　79相当）

大家教授による講演

スタッフによる集合写真

第110回慶應義塾大学医学部生涯教育研修セミナー

慶應義塾大学医学部感染症学教室　岩田　敏（55回）

第110回慶應義塾大学医学部生涯教育研修セミナーは、平成28年10月8日（土）15時よりハイアットリージェンシー東京において開催されました。テーマは、『グローバル化・ボーダレス化時代の感染症を考える』です。

現代の感染症においては、衛生環境の向上、予防・診断・治療技術の進歩により、感染症自体のコントロールは格段に進歩いたしましたが、一方で医学の進歩は耐性菌の増加、易感染患者の増加を生み、交通網の発達は感染症のグローバル化という新たな問題点を生み出しています。その結果、いわゆる新興・再興感染症として、様々な感染症が問題になってきております。21世紀を迎えてからでも、SARS、新型インフルエンザ（A／H1N1）、中東呼吸器症候群（MERS）、エボラウイルス病、ジカウイルス感染症といった感染症の国際的なアウトブレイクが起きており、その脅威は私たちの記憶に新しいところです。また医療関連感染で特に問題となる各種耐性菌についても、海外で問題となっている耐性菌が国内に持ち込まれるリスクは常に存在しており、地球規模での厳重な監視・対策が求められています。今回のセミナーでは、こうしたグローバル化・ボーダレス化する感染症の問題点と対策について、4人の先生方からお話を伺いました。

まずWHO　本部事務局長補として長い間世界の感染症対策を牽引されてきた慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所の中谷比呂樹特任教授からは、『グローバル・ヘルスの課題としての感染症を考える3つの視点』というタイトルで、不健康と貧困の悪循環の遮断、人間の安全保障としての健康危機管理、ダイナミックに発展する研究と医療マーケットの3点についてご講演いただきました。続いて呼吸器感染症由来病原微生物の薬剤耐性機構・分子疫学に詳しい若手研究者でいらっしゃる慶應義塾大学医学部感染症学の諸角美由紀専任講師から『呼吸器感染症における病原微生物の薬剤耐性化とその対策』というタイトルで、小児・成人の肺炎例における原因微生物と耐性化、重症感染症を惹起する溶血性レンサ球菌についてのご講演、抗酸菌感染症分野の第一人者である慶應義塾大学医学部感染制御センターの長谷川直樹教授から『結核と非結核性抗酸菌症―世界の中で日本は?―』というタイトルで、結核と非結核性抗酸菌症の現状と問題点についてのご講演がございました。最後にワクチン開発による感染症予防戦略のオピニオンリーダーである北里大学北里生命科学研究所の中山哲夫特任教授から『グローバル化・ボーダレス化時代における予防接種戦略』というタイトルで、予防接種の問題点と今後のワクチン開発の方向性についてご講演いただきました。いずれも分かりやすいお話で、現代の感染症に関する最新の情報をご参加の皆さまと共有できたのではないかと思います。

恒例の講演会終了後の情報交換会では、〝免疫力アップ〟をテーマにしたお料理を楽しみながら、参加者一同大いに懇親の輪を広げることができました。

筆者（岩田）

諸角先生

中山先生

中谷先生

長谷川先生

医学教育プログラムに関するアンケートご協力のお願い

日頃より慶應義塾大学医学部の教育・研究・診療活動にご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

2017年度に医学部創設100周年を迎えるにあたり、同年９月に日本医学教育評価機構による医学教育分野別評価を受審する運びとなりました。これは、世界医学教育連盟（WFME）の国際基準をふまえて医学教育プログラムを公正かつ適正に評価するもので、医学教育の質を国際的視点から保証することにより、慶應義塾の医学教育の充実・向上を図りたいと考えております。

そこで、各界・各分野でご活躍されていらっしゃる卒業生の皆様のご意見を慶應義塾の医学教育プログラムの改善に反映いたしたく、卒後10年目までの先生方を対象としてアンケート調査を実施させていただくことになりました。ご多忙中、誠に恐縮ではございますが、慶應義塾の医学教育の充実と改革にご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

対象者の皆様には、11月下旬頃にアンケートへのご協力依頼状をご自宅宛に郵送いたします。お受け取りになりましたら、依頼状に記載されているURL、もしくはQRコードからアンケートフォームにアクセスし、ご回答いただきますようお願い申し上げます。皆様からの貴重なご意見をお待ちしております。

〈今後の予定〉
・11月20日以降　アンケートご協力依頼状の送付
・12月22日　アンケートご回答締切

11月20日
医学部長　岡野　栄之
医学教育統轄センター長　平形　道人

慶應義塾 教育・研究・医療 環境整備事業のご案内

2016年11月末、塾員、慶應義塾の現役教職員、学部生の保証人の皆様に、慶應義塾より「慶應義塾 教育・研究・医療 環境整備事業」に関わるダイレクトメールをお届けいたします。（写真参照）

同事業は、慶應義塾大学病院新病院棟建設事業（募金期間：2018年３月31日まで）のほか、慶應義塾大学未来創造塾事業、慶應義塾大学理工学部創立75年記念事業（ともに募金期間は終了）で構成されています。

慶應義塾大学病院新病院棟建設事業へのご寄付は、ダイレクトメール同封の専用振込用紙、またはインターネットからお申し込みいただけます。

いずれの場合も「通信欄」に「三四会へ算入希望」と忘れずにご記入ください。

どうぞよろしくお願いします。

慶應義塾大学医学部開設100年記念事業 参加申込開始のお知らせ

慶應義塾大学医学部は、1917年（大正６年）に大学医学科として発足し、2017年（平成29年）に開設100年を迎えます。そこで医学部開設100年記念事業の一環として下記の行事が開催されることとなりました。

このたび、ご参加申込が開始されますのでお知らせいたします。可能でしたらインターネット申込をご利用くださいますようお願い申し上げます。

この記念すべき行事に是非ご参集いただき、これまでの100年の軌跡に感謝し、新しい時代の幕開けを共に祝いましょう。

参加申込方法：①インターネット申込（推奨）
https://www.100th-registration.med.keio.ac.jp
②本新聞同封の申込葉書
参加申込締切：2016年12月28日（水）

記

開催日時：2017年５月13日（土）
13:00～16:00　記念シンポジウム（演者は予定）
・山中伸弥博士（京都大学）
・Dr. Fred H. Gage（Salk Institute for Biological Studies）
・御子柴克彦博士（理化学研究所）
・北川雄光教授（慶應義塾大学）
・金井弥栄教授（慶應義塾大学）
・本田賢也教授（慶應義塾大学）
・広瀬信義教授（慶應義塾大学）
17:00～18:00　記念式典
18:30～20:30　記念祝賀会
開催場所：ホテルニューオータニ　「鶴の間」「芙蓉の間」
東京都千代田区紀尾井町４―１
会費：３万円（記念式典・記念祝賀会参加の場合）　以上

鑑賞知来

先日、東大名誉教授、渥美和彦先生の米寿祝賀パーティーに出席した。渥美先生は人工心臓開発の業績で有名な方で、現在では日本統合医療学会の名誉理事長として活躍なさっている。

統合医療といえば、父の闘病生活を思い出す。父は私が高校2年のときに腎臓癌と診断されて慶應病院で手術を受けたが、肺に転移し、一時は数週間の命を、宣告された。この父の病気を契機に私は医学部を目指すことになり、68回生の姉、絢子は慶應泌尿器科初の女医となった。

その父は84歳の現在も元気で働いている。癌から奇跡的な生還を成し遂げた父が受けた治療法はまさに統合医療であった。泌尿器科の先生方に手を尽くして頂いたのはもちろんであるが、それに加えて様々な治療法を試みた。今考えると、胡散臭い治療も混ざってはいたが。恐るべきスピードで増殖していた肺転移が一転、縮小し始め、父が回復の兆しを見せたのは私が予科1の夏であった。姉と共に参加していたテニス部の夏合宿中に母から電話があり、亡くなりそうだった父がなんと入院中の病室で神宮の花火大会を観ながらビールを飲んでいるというのだ。それからは数十あった肺の転移巣が日々縮小してゆき、ついには完全に消失した。現代医学では説明できないことが起こりうるのだということが衝撃的であった。父の腎臓癌摘出を執刀して下さった元泌尿器科教授の田崎寛先生が父より早く鬼籍に入られたことには運命の不思議を感じた。最近私がお世話になった方が次々にがんに倒れている。訃報を耳にする度に、父に起きたような奇跡が起きなかったことを悔しく思う。

八十八歳の渥美先生は長年の夢を叶えるための統合医療クリニックを銀座で開業なさるとのこと。今年、五十歳の節目を迎え、私も残りの人生で何ができるかを考え、勇気を持って挑戦していきたいと思う今日この頃である。

（法政大学　宮川路子　70回）